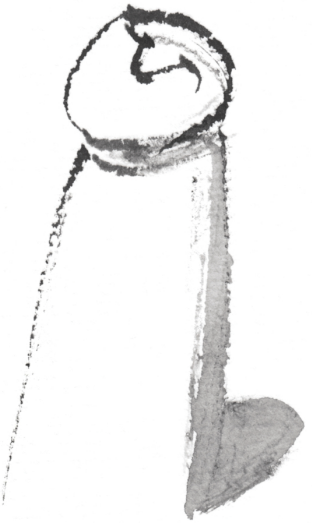
筆筆水筆で描く不思議のらかんたち

草画帖 41



号

月の号です。
表紙はオオマツヨイグサで。
号名はススキ筆です。
写真はマツヨイグサ。
月見草とも呼ばれています。

酔芙蓉月も色づき初むるころ

幼いススキの穂で。月の字を。程よい緊張感。

ツルボ筆。掌中の月。新月。

ヒメヤブラン筆。繊い月、細い人。三日月リズム。

クマツヅラ筆。月下逍遥…、月下吟遊…。

三日月

三日月が
ほのかに光り
淡い地球照が浮かぶ

遥かな闇

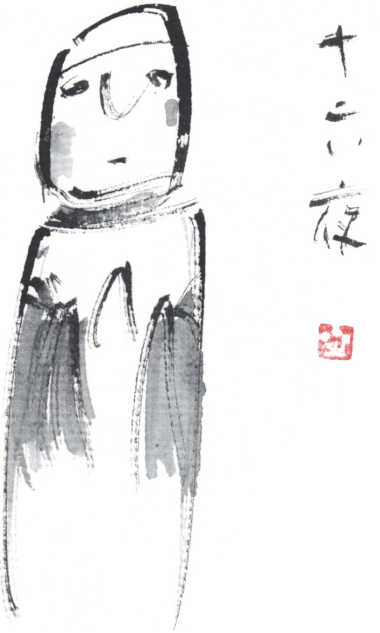
虫の音が
ちんちんちんと
沈んでいった

二十六夜

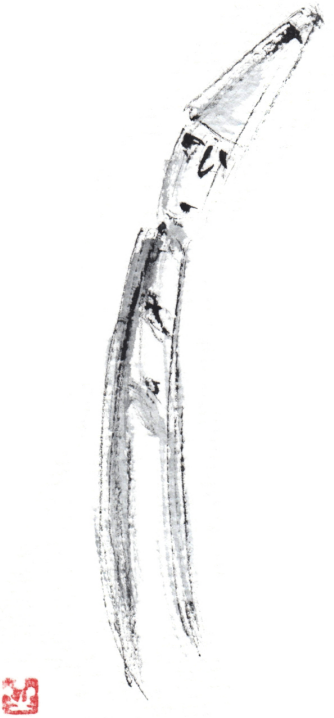
金星が
山の端に灯り
続いて
月白の仄かな辺りに
二十六夜の
細い月の先端が突き出た
双眼鏡で見ると
ぬっと
地球照から昇る
前座に
流星も飛んだ

オミナエシ筆。月に歌う。月も五彩に雲を染めて。

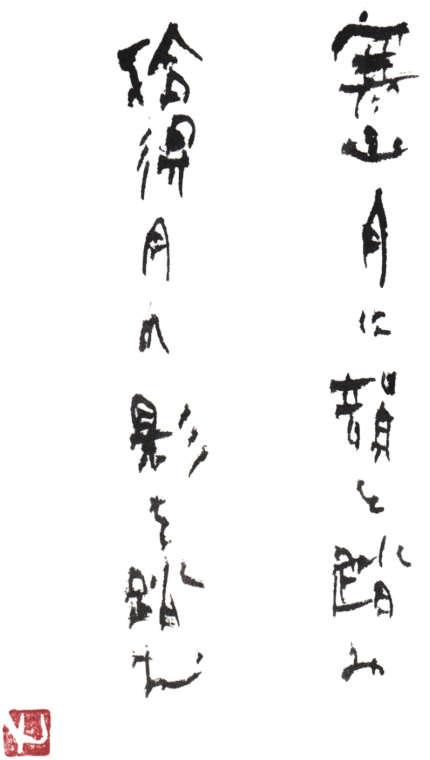
ツユクサ筆。月草。宮沢賢治は月を月天子と称えた。



サワヒヨドリ筆。十六夜はまた新たな旅の初め。



ヒメヤブラン筆。未明の逆三日月は地球照から昇る。



クズ筆。寒山は筆を、拾得は箒を手に月と遊ぶ。

草話

北陸は瓦が美しい。雪を滑らせるための釉薬が月光に濡れて光る。犀川べりに借りた大正時代の家は、昼間の太陽に曝されるとみすぼらしかったが、月のある夜にはじつに凛とした屋根のシルエットと光を放った。

そこでふうらは生まれ、月に戯れ、月に遊ぶ絵をたくさん描いた。

＊

俳句では季語として、殊に仲秋の月を細やかな名で愛でてきた。

昨年、思い立って新月から名月まで詠んでみたいと試みた。けれど肝心の月が一向に出ない。五日目沈む間際に寸刻、九日目の雨上りにようやく月影を拝んだ。苦吟は十六夜以降もなんとか続け、二十九夜の内、月は半分以下の十四夜の登場に終わった。

＊

三日月の地球照は美しい。双眼鏡で毎度の楽しみも、そのまま没していくのを見たことはない。逆三日月の出は、金星との大接近を見ようとして目撃した。山際にぽっと金星が灯ったのも見ものだったが、その後白くぼやけたものがせり上がってきて、細い月の尖端が出現する。金色の舟も美しく、丸い地球照から昇ってくる光景にはなんとも不思議な魅力がある。

俳句 白山鳥翁 ／ 絵 艸々子 ／ 詩 泉井小太郎

草画帖 第41号 2021年9月30日 泉井小太郎編集 六角文庫発行
〒675-2312 兵庫県加西市北条町北条1039　Tel 0790-42-6008